
失われた地からの転生者

アビス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われた地からの転生者

【Nコード】

N2559BA

【作者名】

アビス

【あらすじ】

優れた技術があつたら誰もが欲しがらるだろう。だが、進み過ぎた技術は破滅を招く。

そんな出来事を体験した転生者の物語

プロローグ(前書き)

まさかのもう一つ連載・・・・・・・・・・はつきり言って更新が遅くなる。

だが後悔はしてない。

プロローグ

俺は転生者、まあテンプレよろしくってやつだ。気が付いたら転生ってやつだ。

リリカルなのはに転生した時は、胸がはじけるほど喜んださ。

最初の頃はな。

魔法を使って色んな事をしまくろうぜ！・・・なぐんて思ってた自分
分がバカバカしかった。

魔法は兵器、所詮ただの人殺しの道具さ。魔法で殺しあつて殺しあつて、最後には何もかも無くなつちまった・・・。まあ魔法だけじゃないんだけどな。質量兵器に、色々。物騒なもんで殺しあつた。

大切なもんをたくさん失った。

友人も、家族も。

けど、ここで立ち止まるわけにはいけねえ・・・。

前を向いて生きていかなきゃならねえんだ。

ま、とりあえず前世の故郷である地球に行くとしますかね。

管理局？なにそれおいしいの？

俺は俺のしたいように生きる。

原作キャラがどうなるのが構いやしねえ、俺ア平凡に暮らすとしますかね。

何て気楽に海鳴市に来るんじゃないやなかつたぜ……。

何故かって？いや目の前に……。

「おおっどこだっ？」

「どっでしよう……？」

「……ん？おいその塵芥、貴様何者だ！」

マテリアルがいるんだよ！

あれ？A' s編からもう4年くらい経ってるはず！？

何でだ！？っていつかよくよく考えたら俺原作全然しらねえじゃん！

マテリアルくらいしか・・・あれ何か記憶があやふや・・・・・・・・

。

プロローグ（後書き）

マテリアルの口調ってこんなんでいいかな？

指摘とかしてくれるとつねしいです。

後、残念ですがプレシアはこの小説では出ませ〜ん。

家族が増えた（前書き）

第二部 投下

家族が増えた

さてさて、色々飛ばし過ぎたので地球に来てからのこと話説明しよう。

まず、海鳴市に来て戸籍を偽造してちょっとしたたなぐい方法で金を稼いだ後家を買ってーの仕事をしてーの・・・まあ、色々。で、買い物し終わった後、緑色の結晶？みたいなものを拾って持ち帰ったら急に光り出してー・・・はっ！もしかしてこれが原因！？・・・
・夕飯は何にしようかなー。

・・・え？何？現実逃避はそこまでしておけ？ナンノコトカサツパリダナア？

「おい！聞いておるのか！塵芥！」

ハア・・・やはり現実はみないと。なんかどこぞの新世紀の

某主人公のセリフが頭によぎるが気のせいだろう。

「俺の名前はルイン・A・ヴァル……長いからルイでいい……」

内心、ため息がとまらない。面倒だ、ああ面倒だ、面倒だ。あ……五七五になってる……。

にしても……はて？体がA・Sの時より成長してるような……きのせいか。っていうかA・Sの時ってどうだったっけ……いかん、完璧に忘れてる。あれ？そーいえば管子……覚えてねえ！何かどでかい組織があったはず……ま、いつか。

「おお！何かかっこよくて強そうな名前だな！」

水色の髪をしたツインテールの奴がそう言うが、俺的にはこんな厨二臭い名前はどうかと思ってるんだが。

「黙っておれ！レヴィ！」

ヤマンバみたいな髪の色をしている偉そうな態度をしている奴が怒鳴る。レヴィと言う方はブーブー文句言っているみたいだが……。

「……ちょっといいかな？」

「何でしょうか」

とりあえず俺は物静かで栗色の髪をした方に話しかけた。

「よく分からないから今の状況を把握したいからあんた達の事聞かせてもらってかまわないかな？」

栗色の髪をした女の子はしばらく考えた後頷き、ほかの二人と何やらぺちやくちや話し始めた。

すると、ヤマンバみたいな髪の色をしてる方がこちらの方を向き、

「よかるう。我らについて話してやる代わりに貴様の事も聞かせてもらうぞ」

と、腕を組みながら偉そうな態度をする。んー……………いかな何かも忘れてるな、ま、いつか。

「よーするに、お前さんたちは闇の書の残滓で、その・・・なねは？達の元になったマテリアルで、うんでもってそいつらにぼこられた、と」

「何か釈然としませんがそういうことです」

あの後、色々話しを聞いた。自分達は闇のくとか、マテリアルくとか。うん全部忘れてるな、原作。タイトル名しか覚えてねえorz

「で、貴様は何者だ」

腕を組みながらこちらの方を見るディアーチエ、何者ってえーつと、

「・・・魔導師？・・・たぶん」

うん自分でも結構曖昧なんだよ。うーん刀振り回して、魔法使って、技術もある・・・これ魔導師？

「多分とは何だ！貴様ふざけているのか！」

あ、やべ、怒らせちゃった。

「いやたぶん『マスター、解析終了しました』・・・そ、そ

うか」

自分のデバイス、ルシファーに緑色の結晶について調べてもらったんだけど・・・もーちよい空気読んでほしいなー・・・ハア。関係ないんだけどデバイスの名前も厨二臭い。もっとマシなの付けてほしかったなー。

「なにを解析していたのですか？」

シユテルとかいう女の子がこちらに尋ねる。

ルシファー、説明お願い。

『マスターが拾った緑色の結晶はロストロギアメモリーレストレーション『記憶復元』でした。これはプログラムなどを取り込み、それを復元する機能を持つロストロギアでした。しかし復元するには魔力が必要であり第三者が魔力を送らない限り復元することは不可能です。つまり彼女達が消滅する寸前でロストロギアが彼女たちを取り込み、復活したのはマスターが無意識に魔力を送ったか、ロストロギアがマスターの魔力を吸収した、ということでしょう』

・・・え？つまり俺のせい？

「？うーよく分かんないー」

何の話か分からないようなのか、首をかしげるレヴィ。

「今話を聞いて分からぬのかこのド阿呆めが」

「アホじゃないもん！僕は凄いからアホな振りしてるだけだもん！」

ぎゃあぎゃあとディアーチェのアホ発言を否定するレヴィだが・・・
・・・何とも言い難いな！。

「つまり我らが復活できたのはロストロギアとそこにいる下郎のおかげということだ」

うん、簡潔に分かりやすく言ったね。・・・って助けた人を
下郎扱い！？

「おお！そうなのか！」

そういつて笑顔でこちらの方を向くレヴィ。

「ありがとう！君ってすごくて強くてカッコいいんだね！」

いや、偶々なんだけど・・・

「私たちが復活できたのはあなたのおかげです」

いやだから

「ふん、貴様ごときの下郎に助けられたのは気に食わんが礼を言う。
う。ありがたく思え！」

いや、もう（泣）

「僕此処に住みたい！」

「ハイ？」

あれからしばらくしてレヴィがとんでもないことを言い始めた。

「だってここ凄くてかつこいいじゃん！」

ちなみにうちの家は木造式、どこの武家屋敷みたいな造りだ。あ、今いる所は和室ね。

「私は別に構いませんが……」

「我は反対だ！何故こんな貧相なところで住まなければならんだ！」

……貧相？

「これを見ても貧相と言えるのかな……」

「何？」

片眉をあげるディアーチエ。ルインは戸に手をかけ、思いっきり開けた。

スパアアアアアン！！

「おお！」

レヴィが感嘆の声を上げる。何故なら

「これを見て貧相と言えるかアアアーーーー！！！」

家の庭はものすごく広い、おまけに庭はきれいにしてあるからそれはまた美しい。え？きれいにしてるの誰かって？……俺がんばった

「これはなかなか……」

「うむ……」

お二方も見入ってるようだ。もう貧相だとは言わせん、言わせわせんぞ！言わせは！

「ね！ね！王様！此処に住もうよ！」

「ぬぐぐぐぐ……ふん、そこまで言つのならいいだろう！有り難く思え！塵芥！」

わーいわーいとはしゃぐレヴィと相変わらず無表情のシュテル。

ふう……。。これにて一件……

落ち着かねえ！っていつか俺の意見無視されてた！気づけよ俺！……ああ、もういいや。

こうして俺はマテリアル達と過ごすことになった。

やな予感しかしないが気のせいだ、気のせい、たぶん……

家族が増えた（後書き）

マツテ子大好き何が悪い（笑）

主人公設定

名前：ルイン・A・ヴァル

魔力：S+

魔力光：虹

容姿：髪の色は黒、目は黄色と青のオッドアイ（本人はあまり気に入ってないため、出かけるときはカラコンをしている）

魔力はとても高いが現在リンカーコアが、半壊状態のためあまりでかい魔法は使えない。

治癒魔法、転送魔法、防御魔法、重力魔法、等々多忙な魔法が使える。しかし前文で述べているようにでかいのは使えない。

デバイス：ルシファー

高性能のAIだがルインはあまり魔法を使わないため出番は少ない。

ちなみに技術力は某マッドサイエンティストよりもはるか上、けどあんまり活用しない。

主人公設定（後書き）

マテリアルの日常はどんなの書こうかな？

こたつ(前書き)

マテリアル可愛い

こたつ

「寒い」

「寒いですね」

「寒い」

「ええい、寒い！」

冬は寒いなー。と、言うわけで現在進行形でこたつに入ってまーす。
ちなみに全員羽織物着てる。あつたかいよねこれ。

「あつたかい」

「狭い！」

「ディア チェ、我慢して下さい」

仲が良い(?)ことぞ。

こたつと言ったらやっぱりみかんでしょ。ど真ん中に下サツとな。

「
」

みかんをとって皮をきれ　にむいて

……ん？レヴィがこちらを……いや、むいたみかんを見る。

食べたいのか？

「……食べるか？」

と、言ったら満面の笑顔を浮かべ

「いいのー!？」

いや、まだ沢山あるし別に、ねえ。

俺は頷いてレヴィにみかんを渡した。

「あーん……パクッ」

レヴィは貰ったみかんの一切れを口に入れた。

……感想は？

「ムぐムぐムぐ……まずくない……決して不味くないぞ！」

……おいしいじゃなくて？

でもかわいいからいつか。

「ほら、お前らも食べな」

「では頂きます」

「我に命令するな塵芥」

むーディア チェにはいつか名前と呼ばせてやる。ていつか塵芥やめて。

でも可愛いから許す。

シユテルは俺がむいたのを覚えていたのかきれいにむいた。……デア
イア チエ、チラチラとシユテルが皮むいてるの見てる事くらい分
かるって。でも何か心がキュンとする。

「おいしいですね」

そのわりには無表情だね。

「ふ、ふん！まあ、ましだな！」

たくさん食べても説得力無いよ。

「ムニヤムニヤ……」

こたつに頬杖をついて眠ってらっしゃるレヴィ、可愛い。

「スヤスヤ……」

シュテルは畳に寝っ転がって寝てる、可愛い。

「ゲー」

ディア チェ、畳に涎たらさないで！でも可愛いから許す。

……あれ？何かおかしいような……気のせいかな。

でも可愛い事は悪い事じゃない。

と、ディア チェのほっぺをプニプニ突っついている俺は悪くない。

ピンポーン

……あつ詫急便だ。

出れるの俺しかいない。

寒いのだな〜……にしてもこんなに寒いと雪でも降りそうだな〜

玄関に歩きながらそんな事を考えている。

小さくて白いものがチラホラ降ってることにも気付かずに……

こたつ（後書き）

マテリアルが可愛すぎて生きるのが辛い。

ちなみに主人公マテリアルのことが好きかも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2559ba/>

失われた地からの転生者

2012年1月9日06時46分発行